

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★

## 桃さんのしあわせ (桃姐)

2011年・中国、香港映画  
配給/ツイン・119分

2012 (平成24) 年8月31日鑑賞

角川映画試写室

### Data

監督・製作：許鞍華 (アン・ホイ)

製作・原作：李恩霖 (ロジャー・リー)

脚本：陳淑賢 (スーザン・チャン)

出演：葉德嫻 (ディニー・イップ)

／劉德華 (アンディ・ラウ)

／秦海璐 (チン・ハイルー)

／王馥荔 (ワン・フーリー)

／林二汶 (イーマン・ラム)

／許碧姬 (ホボ・ホイ)／秦

沛 (チョン・パイ)／許素瑩  
(ホイ・ソーイン)

## 👁️👁️ みどころ

香港映画はアクションとラブストーリーの宝庫だが、『女人、四十。』(95年)の女流監督・許鞍華(アン・ホイ)は一貫して「老い」をテーマとした独自路線を!60年のベテランメイドが脳卒中で倒れたところから始まる、老人ホームを舞台とした物語はあくまでアン・ホイ監督の温かさと優しさに満ち溢れているから、思わずホッコリ。

ちなみに、ベネチア国際映画祭主演女優賞を受賞した葉德嫻(ディニー・イップ)は吉永小百合より2歳も若い美人女優であることにも注目!

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□この女性監督のライフワークは、このテーマ!■□

許鞍華(アン・ホイ)監督に『女人、四十。』(95年)という作品があるということは『中国映画の全貌2000』(東光徳間編)を隅から隅まで読んだことによって知っていたが、今回『桃(タオ)さんのしあわせ(桃姐)』を観た事によって、1947年生まれ的女流監督アン・ホイが一貫して「老い」をテーマとした映画づくりをしていることをはじめて知った。『女人、四十。』も当時相当の興行収入を上げたそうだが、本作も中国・香港・台湾で公開されて以来15億円以上の興行収入を上げたばかりか、主演の葉德嫻(ディニー・イップ)は2011年9月のベネチア国際映画祭で主演女優賞を受賞したそう。香港映画といえばアクション映画か純愛映画と相場が決まっている(?)が、なぜこの監督のこんな地味なテーマの本作が大ヒットを?

本作の原作は『女人、四十。』をプロデュースした李恩霖(ロジャー・リー)が自分の体験を基にした自叙伝『桃姐與我』だが、なぜ中華圏の人々はこんな映画に関心を?それはきっと、少子高齢化が進む日本はもちろん、一人っ子政策の歪みが顕在化している中国で

も、老いやそこから派生する家族の(絆の)問題が大きな関心事になっているためだろう。ストーリー自体は単純なものだが、アン・ホイ監督が描く73歳のメイド桃さんの物語に注目!

## ■なぜ、アンディ・ラウがノーギャラで出演?■

私は1997年に一度だけ香港旅行に行ったが、その時香港のメイドはフィリピン人が多いと聞いていた。しかし、梁家のメイドとして13歳から73歳の今日まで60年間も4代の主に仕えてきた桃さんは中国人。なぜそうなったのかは映画冒頭に語られるちょっとしたナレーションで明かされるから、それに注目。映画冒頭、今は映画プロデューサーとして活躍している梁家の主ロジャーを甲斐甲斐しく世話する桃さんの姿が映し出されるが、その仕事ぶりはまさに完璧。しかし、ある日この桃さんが脳卒中で倒れると……。

私はディニー・イップという女優の名前を知らなかったし、それを知っている日本人も少ないだろうが、本作の企画から参加し、ロジャー役にノーギャラで出演した劉徳華(アンディ・ラウ)は誰もが知っている大スター。そんなアンディ・ラウがノーギャラで本作に出演し、老人ホームへの入居をはじめ、甲斐甲斐しく実の息子のようにメイドの桃さんを世話する独身の中年男役を演じているのは一体なぜ?そんな裏の事情も日本人にはわかりにくいから、本作を鑑賞するについては是非パンフレットを購入し、本作誕生に至る裏話にも興味を持ってもらいたい。

## ■すべて良い人ばかり!監督の視線はあくまで優しく!■

昨今の日本では凶悪犯罪が相次いでいるが、本作に登場する人物は良い人ばかり。当初は老人ホームの費用の高さにビックリし、環境の変化に戸惑っていた桃さんも、少しずつ個性豊かなホームの入居者達と馴染んでいくことに。そんな桃さんの最大の楽しみは、時々ロジャーがホームを訪問してくれること。桃さんの健康状態はちょっとした外出には何の支障もないから、ロジャーと一緒に散歩に出かけ、茶餐廳(喫茶、軽食を兼ねた飲食店)で食事している風景は何とも心地良い。私の目には、今までわがまま放題に育ってきたロジャーがなぜこんなに甲斐甲斐しく世話する男に変身できたのかが不思議だが、決してロジャーが無理をしているのではないことはスクリーンからひしひしと伝わってくる。そんな温かさを醸し出すアン・ホイ監督の演出は巧みだし、その視線はどこまでも優しい。

サンフランシスコに移住しているロジャーの母親(王馥荔/ワン・フーリー)がホームを訪ねて来た時のストーリーや、お正月を主任のチョイさん(秦海璐/チン・ハイルー)と2人だけで過ごすストーリーも温かく、思わずホッコリ。面白いのは、コトあるごとに「300ドル貸してくれ」と言う老人キンさん(秦沛/チョン・パイ)のキャラ。あまりの厚かましさにロジャーは2度目は拒否したが、桃さんは黙って300ドルを。そんなキンさんはその後何度も300ドルをねだってきたが、その使い道は意外にも……。そんなキンさんすら温かく迎え入れた桃さんだったから、桃さんのお葬式には……。

## ■食事風景にも注目!■

料理をメインとした映画は、『幸せのレシピ』（07年）（『シネマルーム16』323頁参照）、『しあわせのかおり（幸福的馨香）』（08年）（『シネマルーム21』194頁参照）、『南極料理人』（09年）などいろいろある。本作は料理をメインにした映画ではないが、桃さんは60年間にわたって梁家に仕えてきたベテランメイドだから、桃さんがつくる料理の数々にも注目。映画冒頭ロジャーは大好きな牛タン煮込みを最近出してくれないことに不満を述べていたが、それに対する桃さんの返答は？

必ずしも値段が高く豪華な食材を使えば美味しい料理が作れるわけではないことが、本作を観ていると料理に詳しくない私でもよくわかる。中国旅行に行くと食事が楽しみだが、それは中国では食材はもとより料理の種類が多いため。十把一絡げに中華料理と言ってもしまえば、あまりに身も蓋もない。旅行の度に少しずつ質問し、少しずついろいろな料理の味を覚えていくことが大切だ。そんな桃さんの料理はロジャーだけでなく彼の学友たちにも楽しみだっただけでなく、彼らから「桃さんの手作りの鴨の詰め物が恋しい」「その他にもイモ菓子にカニの蒸し物」「一番の好物は牛スジだった」などのセリフが登場するから、料理の得意な人はとりわけそれに注目を！

このように観ていると、料理は単に美味しさや豪華さを競い合うものではなく、60年間メイドを続けてきた桃さんがどのような人間とどのような関係でつながっているかを確認する重要な手段になっていることがわかる。そうだからこそ、それまでそのありがたさを特に意識することなく桃さんの料理を味わってきたロジャーが、茶餐廳では少ししか食べられない桃さんのために注文する料理を考え、それを取り分けている姿が強く印象に残る。

## ■桃さんを演じたディニー・イップは、本当は美人女優！■

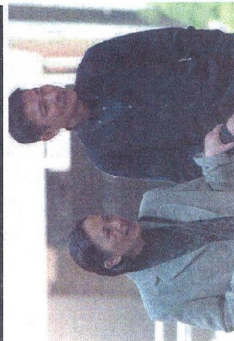
今、日本では吉永小百合116本目の主演作『北のカナリアたち』（12年）の公開が迫っているが、彼女は1945年生まれだから67歳。しかし、『佐賀のがばいばあちゃん』（06年）（『シネマルーム11』102頁参照）の吉行和子や『わが母の記』（12年）の樹木希林のようなおばあさん役はご法度で、せいぜい『母べえ』（07年）（『シネマルーム18』236頁参照）までが限度？他方、本作における桃さんは13歳でメイドになってから60年経っているから、その御年は73歳。すると、そんな老メイド役を見事に演じたうえ、次第に病状が悪化していく姿をリアルに表現したディニー・イップは、それなりの老女優？そう思ってプレスシートを見ると、ビックリ。何と彼女は1947年生まれだから、吉永小百合より2歳も若い。しかも、その経歴や写真を見ると、本当は吉永小百合と同じような美人女優なのだ。

本作でディニー・イップはベネチア国際映画祭の最優秀主演女優賞を受賞したが、その時審査委員長のダーレン・アロノフスキーは、「こんなに若くて美しい人があの桃さんを演じていたとは！」と驚きと賞賛を隠さなかったらしい。近い将来には吉永小百合がこんな役を演じるかもしれないと考えながら、本当は美人女優のディニー・イップが、アンディ・ラウと息子のような関係になるメイド役桃さんを見事に演じたことに拍手。

2012（平成24）年9月10日記

# 『日本と中国』 2241号 (2020年6月1日)

## 桃さんのしあわせ



1947年生まれ的女流監督アン・ホイが、本作と同様『若い』がテーマの『女人、四十。』(96年)を抜き、当時相当の興行収入を上げたが、本作も中国・香港・台湾で公開されて以来15億円以上の興行収入を上げたばかりか、主演のアン・ワイ・イップは2011年9月のベネチア国際映画祭で主演女優賞を受賞した。原作は、『女人、四十。』をプロデュースしたロジャー・リーの自伝『親類興我』地味なテーマながら大ヒットに至ったのは、少子高齢化が進む日本はもちろん、一人っ子政策の歪みが顕在化している中国でも、若い世代から生まれる家族の(絆の)問題が大きなる関心事になっているためだろう。73歳のメイド桃さんの物語に要注目である。

私は97年に一度だけ香港を旅したが、当時香港のメイドは

## メイドの介護に奔走、強い絆で結ばれる主従の関係

フィリピン人が多い聞いていた。しかし、染家のメイドとして13歳から73歳の今まで60年間も4代の主に住えてきた桃さんが中国人の記は、私は桃さんを演じるアン・ワイ・イップという女優の名前を知らなかったが、本作の企画から参加し、ロジャー役で出演したアン・ワイ・イップは誰が知る大スター。そんな彼がノーギャラで出演し、メイドの職期を世話する独身の中年男役を演じているのは一体なぜ? 本作誕生に至る裏話にも興味を持ってもらいたい。

家脈のほとんとは海外に發注し、今は香港で映画プロデューサーとして活躍するロジャー。彼の世話をしている桃さんがある日流離業で働くロジャーに迷惑をかけないよう、メイドを許めて老人ホームに入ると告げるが…。

本作は料理がメインの映画ではないが、ロジャーや彼の学友たちが楽しみにしていた桃さんがつくる料理の数は必見。茶藝、饅頭、少量しか食べられない桃さんのために注文するメニューを考え、それを取り分けるロジャーの姿が印象深い。

原題: 樹姐  
監督: 許鞍華  
製作・原作: 李恩霖  
脚本: 陳淑賢  
出演: 葉德嫻/劉德華/秦海璐/王靚荔/林二汶  
製作年: 2011年、119分  
中国・香港、ツイーン  
配給:

熱血弁護士  
坂和章平

「映画を斬る」コーナーをはじめ映画に関する記事掲載。公式サイトは毎日更新。2019年大阪府中法務事務所。

中国映画を語る

(おかわ・しちべい)  
1947年生まれ、松山由起子、大阪大学芸術学部卒、朗読劇『狼』を監督。数々の映画、日本映画学会、川島、同様に日本労働組合「新報」を監督。『探偵的』中国映画(2004年)、『二つのマリア』(2007年)。